

39. イエスの死はどのようなものであったか？

イエスはNisan（ニサン）の月の14日目、西暦30年4月7日に十字架上に釘で打ち付けられて死にました。

2014/02/04

福音書の記述への批判的な分析からこのように結論づけられますが、これはタルムードで伝えられている死に関する言及とは異なるものです。

十字架に張り付けるというのはローマ帝国が奴隸と反逆者に科した死刑の一つです。それは、不名誉という意味合いがありローマ市民には適用されず、外国人のみに適用されました。ローマ帝国の行政官がそれをイスラエルの土地に導入して以来、比較的しばしば行われたことを示す多数の証拠があります。シリアの Quintilio Varo 総督は反乱に対する報復として紀元前 4 年に 2000 人のユダヤ人を十字架にかけました。

イエスがどのような形で十字架に架けられたかということについて言及する上で、エルサレムの郊外にある Givat ha-Mivtar の墳墓で行われた発掘は間違いなく興味深いものです。そこで、西暦 1 世紀の前半に十字架に架けられた人の埋葬が発見されました。すなわち、イエスと同時代のものです。墓碑銘から Haggol の息子のヨハネという名前が判ります。身長は 170 センチで、死んだ時はお

よそ25歳であったと推測されます。十字架に架けられた者であることは疑う余地がありません。というのも墓掘り人は足を留めていた釘を取り除くことが出来ず釘を付けたまま埋葬しています。同時に十字架の木の一部分も残っていました。これからその若者の十字架はオリーブの木でできていた事が判りました。両脚の間に木の小さな出っ張りがあり、それが体を少し支え、椅子として使えたように見えます。そのようにして罪人は少し力を回復することが出来たわけで、その支えが無かつたら腕から吊り下げられた全体重で窒息による即死につながったでしょうが、それを避けるために呼吸が出来るようにし、苦痛を引き延ばしたのでしょう。両脚は僅かに開き、たわませてあったようです。その墓の中で発見された遺骨の手の骨は釘が貫通しておらず、砕けた形跡もありません。従って、多分その人の両腕は単に十字架の横木に強く縛りつけ

られていたのであろうと考えられます（これはイエスが釘を打たれていたのとは異なります）。一方、両足は釘で貫かれていました。その片足には大きくて十分に長い釘が打たれたまま残っていました。その置かれていた位置から、同じ釘が両足を貫通していたと考えられます。すなわち両脚を少し開き、支柱が両脚の間にくるようにし、右くるぶしの左側と左くるぶしの右側を横木の側面で支え、長い釘を最初に足のくるぶしからくるぶしに打ち、その後に木の支柱に、続いてもう一方の足に打ちこんだと考えられます。キケロによると、その十字架への磔の刑は〈最も重い罪〉、〈最も残酷かつ残酷〉、〈最悪かつ極悪、奴隸に対する拷問〉です（キケロ Verrem II、V、60-61）。

それにもかかわらず、イエスの十字架上での死を想像して、真実に近づくためには歴史が例証できる悲劇的

な痛ましい詳細にとどまっていては十分ではありません。最も深い真実は「キリストは聖書に書いてあった通り我々の罪のために死んでくださったのである」(1コリント15,3)と告白することです。十字架上の死に寛大に身をゆだねたということは全人類に対する神の愛情の大きさを明らかにしています。「私たちがまだ罪人であった時、私たちの為に死んでくださったことによって、神は私たちにに対するご自分の愛を示されているのです」(ローマ5,8)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <https://opusdei.org/ja-jp/article/39-iesunosi-hadonoyounamonodeatsutaka/> (2026/02/07)